

Account of the Life and Writings of Adam Smith LL. D.

法学博士 アダム・スミスの生涯と諸著作

についての説話(四)

エディンバラ王立学会会報から

〔ステュワート (Stewart) 氏による、一七九三年の一月二日および三月一八日の講読〕

武 田 正 二

第五節 この説話の結び

『諸国民の富』の公刊の約二年後、スミス氏は、スコットランド公国関税委員の一人に任命された。この職は、彼の評価するところでは、それがバックルーフ公の懇請で彼に付与されていることからして、一種特別の価値を得るにいたった一つの高い地位であった。この二年のうちの比較的大部分を、彼は、ロンドンで過し、はなはだしく広範にわたって変化にも富む社交を享受していたため、学的研究にたいする自分の興趣をほしのままにするなどのような機会をも、自らに得ることができなかった。けれども、彼の時間は、自分自身のために、失われたのではなかった。なぜ

なら、その大部分は、イギリス文芸界における第一級の名士たちのうちの幾人かともについてやされたからである。これらの名士のうちでも、少しも不都合なことの無い人士の名が、バーナード博士(Dr. Barnard)によって、同博士の有名な『ジョッシュュア・レイノールズ卿とその友人たちに捧げられた詩集』(*Verses addressed to Sir Joshua Reynolds and his Friends*)のうちに、留められている。

僕が思想をもつてもそれを表現することができないなら、

ギボン(Gibbon)は僕にその着方を教えてくれるだろう、

選り抜きの簡潔な言葉で。

ジョーンズ(Jones)は僕に謙譲とギリシア語を教えてください、

スミスは考え方を、バーク(Burke)は話し方を、

そしてボークレール(Beauleure)は談話の仕方を。^①

① 一七七六年版の『年鑑』(Annual Register)を参照された。

その関税局勤務の結果、スミス氏は、一七七八年に、エディンバラに移住したが、その地に、彼はその生涯の晩年一二年を過ごし、彼のあらゆる必要をみたすに足る以上のある富裕を楽しんだし、また、彼にとってはそれ以上なお貴重なものである、残生の彼の日々を、自分の青春時代の仲間たちの間で過したいという期待をまかなえるにいたった。

彼の母は、今では、至極老令であったけれども、かなりの程度の一つの健康をなお保持していたし、またその知力もすべて損うことなしに保有していて、彼を伴っては町に出かけていった。それから彼の従妹であるジェーン・ダグラス嬢(Miss Jane Douglas)(同嬢は、以前は、グラスゴウにおける彼の家族の一員でもあったことがあったし、ま

と同嬢には、彼もある兄弟愛をいつも感じていたのであったが）は、彼の叔母が病弱のために必要とするやさしい心遣いを、彼と分ち合いながらも、彼の家庭経済についての親身のその世話によって、彼が格別不得手としている一つの管理から、彼を、救つてもくれた。

彼の新しい職務がもたらしてくれたその所得の増加のために、彼は、彼の以前の事情が許してくれたよりもはるかに広範囲にわたって、彼の素質にやどる天性の寛大さを、満足させることができた。しかして彼の死去のさいにおける彼の資産の状態は、彼のきわめてつましやかな世帯と比較して、彼の親しい知友たちが、彼の年々の貯金のうちの一大部分は人目にふれない慈善事業の斡旋に当てられていたのではないか、としばしばいぶかっていたことを、疑いの余地もなく、確証してくれた。僅かではあるが卓越した一連の蔵書は、彼がその選択に多大の判断力を働かせて徐々に形成していったものではあるけれど、また一本の簡素なテーパーは、接待用のものであるにしても、一種の招待の形式もとらないで、彼がいつも喜んで彼の友人たちを迎い入れたものではあるけれども、それらは、彼自身の出費と考えることができる唯一の物入りであった。^①

① 自分の善意の斡旋を全く隠しておくことが不可能なことを見出した諸事例における、スマイス氏の慈悲にかんする幾つかのきわめて感動的な実例が、彼の親族のうちでも近しい関係にある親族、および彼の最も信頼している友人たちのうちの一人であるイナネッセの今は亡きパトリック・ロスさん（The late Patrick Ross, Esq.）の娘さんであられるロス嬢（Miss Ross）によって、わたくしに、語られている。それらの実例は、すべて、一つの規模において、彼の財産から予期してもよかつたであらうものを、はるかに超えていたし、また彼の諸感情の繊細さと彼の心情の寛厚さのためには、ひとしく名誉とすべき事情を伴うものでもあった。

彼のエディンバラへの移住が生みだしたその諸習性における変化は、その学芸上の諸探究にとつては、ひとしく有

利なものではなかった。彼の職務上の諸義務は、ほとんど全く思想的な努力を必要としなかったけれども、それでもなお十分に、彼の心魂を消耗させ、彼の注意力を消散させるにいたった。しかして彼の生涯が閉じられてしまった今では、その生涯がもっと世界のために有益な、そしてもっと彼の精神にふさわしい諸労役に尽されてしまわなかったことを悲嘆することもせずに、それらの義務が消尽してしまった時間に省察を加えてみることは不可能である。

彼のこの都市における居住の最初の年次のあいだにあっては、彼の学的諸研究も、全く休止していたようである。ただ彼の文学にたいする情熱が、彼の閑暇を慰めて、彼の談話に活気をそえるのに役立つだけだった。きわめて早い頃にいろいろと近づきつつあるのを感じはじめてもいた年令的な病弱加減のために、彼は、彼が公共のためにも、また彼自身の名声のためにも、なお背負っているものを、晩年にも思い起していたけれど、それも、そのときでは遅すぎた。彼が公言していたこともある諸労作にかんする主要な諸資料は、長い以前に、すでに収集されていたのであった。しかししてそれらの資料に、彼が喜びそうな体系的雛案を施すためには、つまり、彼が学的研究の上で練磨していたのではあったところの、しかし結局構文上のその経験も、彼が至極難儀して、彼自身の興趣に合うように調整したところの、流れるような一見巧まない文体のもつ諸修飾を施すためには、二、三年の健康と穩棲以外には、おそらく欲しいものとしてほとんど何もなかったのである。^①

① スミス氏がその死去の少し前にわたくしに述べてくれたことではあるが、著作に全く習熟した後も、彼は、最初におけると同様に、ゆっくりと、しかも大変に辛苦して文章を構成した。それと同時に、彼がつけ加えたのではあるが、ヒューム氏は、この点で、大変に並はずれた手早さを習得してしまっていたので、その『歴史』(History)のうちの最後の諸巻は、二、三の傍注の訂正をもったまま、彼の原稿から印刷に廻された。

幾人かの読者たちの知りたいと思っっている好奇心を満足させてくれるかもしれないが、スミス氏が構文に没頭していたときに

は、彼は、通常、自分の部屋を行ったり来たりして、秘書に書き取らせた。ヒューム氏の労作はすべて、(わたくしも確信しているのだが)、自分自身の手で書き上げられた。批判的な読者なら、わたくしも思うのだが、この二人の古典的な著作家の異なる文体のうちに、学的研究にかんする彼らの異なる様式のもつ諸効果というものを、感知することができよう。

彼の母の一七八四年における死去、それにつづいて起ったダグラス嬢の一七八八年における死去は、ほぼ確かなことではあるが、これらの計画を挫折させる一因にはなった。彼女らは、六〇年以上にわたり、彼の恋愛の対象であったのであった、だから、彼女らとの交情のうちに、彼は、その幼少時から、一つの家族のもつ恋愛の情というものについて彼がこれまでに知っていたすべてを、楽しんでいたのであった。①彼は、今や、孤立でありまた無援でもあった。しかし彼は、彼の失意に、平然として耐え、しかも一見したところでは、彼の以前の明朗さを取り戻してはいたが、それでも彼の健康と体力は、彼の死の時期まで徐々に衰えていって、ついにその死も、一七九〇年の七月にやってきた、彼の従妹の死去の約二年後に、また彼の母の死去の六年後に。彼の最後の病いは、彼の腸にかんする一種の慢性疾患から起ったので、長くぐずついで苦しうであった、しかしその慢性疾患を軽減するために、彼は彼の人たちの最も深い思い遣りある同情から、また彼自身の精神の完全な諦観からも、あらゆる慰藉を得ることができたのである。

① スミス氏の生涯のうちの早い頃には、彼の友人たちにとっては周知のことであるのだが、彼は、幾年かにわたり、大変な美貌と教養とをもつある令嬢に愛着を抱いていた。彼の求愛がどれほどまでに好意をもって受け入れられていたか、あるいは彼の結婚を阻止しているどのような事情があったかを、わたくしは教わることができないでいる。しかしわたくしは、かなり確かなことであると信じているのだが、この失意の後には、彼も、結婚のことを、全く思いめぐらすことがなくなった。わたくしが匂わしている婦人もまた、未婚のままに亡くなった。彼女は、スミス氏よりもかなりの年数にわたって生きながらいちし、またこ

の回想の初版の公刊後も長く存命であった。わたくしは、彼女にお目にかかる楽しみを得たが、そのときには、彼女も八〇になっていた、それでもそのときには、彼女は、彼女の以前の美貌についてははっきりした面影を、とどめていた。彼女の分別力あるもろもろの能力と彼女の気質のもつ快活さは、時の手練に何もわずらわされることがなかったようにおもわれた。

その死の二、三日前に、自分の終焉が急速に近づいていることを識ると、彼は、彼が自分の遺言執行人たちの配慮にゆだねておいた脈絡のない幾つかの試論を除いて、自分の手稿類のすべてを、焼却してくれるように、と指図した、そこで、それらの手稿類は、火中に投ぜられた。これらの論文の個々の内容がどのようなものであったかは、彼の最も親しい友人たちにさえ知られていない。だが、これらの論文が、部分的には、エディンバラで一七四八年に講読した**修辞学**にかんする講義案、ならびにグラスゴウにおける彼の講義課程の一部を形成していた**自然宗教と法理学**とにかんする講義案から構成されていたことは、少しも疑いのありえないことである。学問のためには取り返しのつかないこの損傷が、ある程度には、彼の死後の名声についての創作家的な一つの過剰意識から起っていたことは、おそらく、本当であるかもしれない。しかし、彼の手稿類のうちの幾つかにかんしては、われわれは、彼がもっと高邁な諸動機に左右されていたことを、想定してはいけなйдらうか？ 自分の青春時代から、道徳的または政治的な実証的諸研究に心奪われていた一人の哲学者が、自己自身の諸見解が基礎づけられているさいの諸根拠を他の人たちのために論述するさいに、完全に自己の希望を継承しつづけてゆくということは、まことに稀有なことである。だからして、ここからしても、公共のために、自分の率直さや自分の寛容さや自分の判断力を是認しているところのある個人の既知の諸原理は、何か特定の折に、公共の支持において生み出すことができる証言とは関係なしに、一つの重量感と一つの権威とを得る資格をもつのである。このような事情についてのある秘かな意識、および、一つの重要な論証

をも正当に評価しないことによれば、真理の進歩も前進させられるよりはむしろ後退させられるかもしれないという一種の理解は、多くの創作家たちをして、自分たちの最も貴重な労苦を重ねた未完の諸成果を、多分に、世の中から撤回するような気持ちにさせてしまうし、また自分たちが、人類にとって格別に興味ぶかくもあるとみなした諸真理にいろいろと同意していることの一般的な承認を与えることをもって、自ら満足するような気持ちにもさせてしまうのである。^①

① 以上のことを書くことから、わたくしは、ハットン博士 (Dr. Hutton) のご好意により、次のような詳細を知りにいたった。すなわち――

「最後の病気にかかるしばらく前で、ミス氏がロンドンに行く必要もあったとき、彼は、自分の手稿類の処理をゆだねておいた自分の友人たちに、万一自分が死ぬようなことが起るなら、部厚な自分のすべての講義案は焼却してもらいたいし、また自分の手稿類のうちの残部とともに、諸兄が喜びそうなものも処分してもらいたい、と強請した。今や衰弱もつのもつて、自分の生命の迫りくる余炎を見たとると、彼は、自分の友人たちに、再度同じ問題にかんして、言伝てをした。友人たちは、彼が頼んでいるように自分たちでその希望をかなえるからと彼を執りなして、その心を、楽にしてやった。彼も、そのときには、満足していた。しかし、幾日か後になっても、自分の杞憂が全然取り除かれていないのを識ると、彼は、友人たちのうちの一人に、部厚な手稿類を直ちに焼却してくれるように懇願した。そこで、このことが為された、だから、彼の心も大変に救われたので、彼は、その晩も、いつものような自分の心安らかさをもって、友人たちを迎い入れることができた。

「友人たちは、日曜日ごとに彼と夕食を共にするのを慣例にしていたのであって、その晩も、友人たちのうちのかなり数多い者が会合をした。ミス氏は、友人たちとともに、いつものように起き上っていることができるとは思わなかったので、夕食の前に、寝室に引退った。そして彼は引退ってゆきながら、彼の友人たちに、『僕たちは、この会合を、ある他の場所に移さなければならぬですよ』、と言うことによつて、暇乞いをした。彼は、ほんの二、三日後に亡くなった」。

ミス氏の友人たちのうちでも親密な一友人であつて、手稿類の問題にかんする座談会の一つにも出席したリッデル氏 (Mr. Riddell) は、ハットン博士の覚書につけ加えて、わたくしに、ミス氏が、「自分は実に少ししか仕事をしなかつた」と悔んで

いたことを伝えてくれた。「しかし、僕は」、と彼は言った。「もつと仕事をしようつもりだったのだ。だから、僕の文書類のうちには、大量に作成することができたであろう諸資料があるのだ。しかし、それも、今となっては、問題外である」と。

彼の死去のときに、自ら所有していたであろうような未完の諸著作を焼却してしまうという考いが、何か突発的な、あるいはあわてふためいた決断の結果でなかったことは、スミス氏によって、一七七三年に、つまり彼が、スコットランドをかかなり長く不在にする見通しをもつて、ロンドンへの旅立ちの準備をすすめていた一つの時機に、書き上げられていたヒューム氏宛の次の書簡からしても、明らかである。

「一七七三年四月一六日、エディンバラ

親愛なるわが友へ——僕は、学芸上の僕のすべての論考にかんする配慮を、貴兄にお任せしているのでありますから、僕は貴兄に申し上げておかなければならないのですが、僕が携行してまいります論稿を除きましては、デカルト(Descartes)の時代にいたるまで次ぎ次ぎと流行してまいりました天体物理学上の諸体系にかんする一種の歴史を内容とします一大著作のうちのある未完の手稿以外には、公刊に値するものは何一つないのであります。それさい一つの意図をもつ若者向けの労作にかんするある未完の手稿として公刊してはいけなものであらうかどうかは、わたくしも貴兄のご判断に全くお任せするものです、尤も、わたくしは、その手稿のうちの幾つかの部分のうちに堅実さ以上の洗練さがあるかどうかを、自分でも疑いはじめています。この取るに足りない労作は、僕の裏の部屋の一冊の薄い二つ折の論文綴の中に入れてあるでしょう。その机の中に入っているでしょうか、それとも、僕の寝室に立ててある一つの引出付の大机のガラス折扉の内にあるでしょう他の杜撰な論稿はすべて、同じガラス折扉の内と同様に置いてあるでしょう約一八冊の薄い二つ折の論文綴とともに、何も検討されずに焼却されますようにお願いします。僕がきわめて突発的に死ぬようなことでもなければ、僕は、携行してまいります諸論稿を、念には念を入れまして貴兄に惠贈する所存であります。——僕は、いつに変わらず、わが親愛なる友である、最も誠実な貴兄のものではありません。

アダム・スミス

デビッド・ヒューム学兄へ

アンドル・スクエア街

「

『道徳的諸情操の理論』(第六版、二巻 裏八頁、一七九〇年)のための増補は、その大部分が激痛を伴う病苦の

下で構成されたのであるが、幸運なことにも、前年の冬の初めに印刷に廻されていたのであって、作者も、その労作の公刊を見るまでは存命であった。この増補分に貫流している道徳的で厳肅な格調は、彼の衰いゆく健康の事情に関連させてみると、その感動的な修辭法に一種独特な魅力を加えてくれるし、またその青年時代のアカデミカルな隠棲生活において、彼の天賦の才の最初の諸熱情をめぐめさせたところの、しかも彼の精神の最後の諸努力もそこにあったところの、崇高な真理のために、どうあっても、一つの新しい興味をそそらずにはおかない。

一七八七年に、グラスゴウ大学総長に選任された結果、その學術団体の学長に宛てて發送された一通の書簡には、彼の學問遍歴のうちでもとりわけてこれらの重要な學的諸研究に献身していた時期を、彼がいつも回想していたさいの満足感にかんして、一つの心楽しい記録が残されている。「いかなる拔擢といえども」と彼は言う「わたくしに、かくも多大の眞の満足感を、与えることはできなかったでしょう。いかなる人といえども、わたくしがグラスゴウ大学にたいして負っています以上の多大の諸責務を、一つの団体にたいしまして負うことはできません。グラスゴウ大学は、わたくしを、教育してくれました。グラスゴウ大学は、わたくしを、オックスフォードに送ってくれました。わたくしがスコットランドに帰ってまいりますとすぐその後で、グラスゴウ大学は、わたくしを、当大学自体の構成員たちの一人に選任してくれました、そしてその後、わたくしを、けっして忘れられるはずがないハチスン博士の諸才幹と諸徳性とが一つのすぐれた実例の程を挙示してまいりました、もう一つの職席に拔擢してくれられました。わたくしがこの団体の一構成員として費してまいりました一三年の歲月は、わたくしも、わたくしの生涯のうちのすぐれて最も有用な時期として、それゆえにまたすぐれて最も幸福な最も名譽ある時期としても、思い起しています。しかしして今や、二三年ものご無沙汰の後に、わたくしの旧友たちと擁護者たちによりまして、かくもきわめて快

的な一つの方式に則って思い起されますということは、貴殿にたいしましても容易に表明することができません心底からのある喜びを、わたくしに与える次第であります」。

わたくしが今やなし終えるにいたった簡潔は説話は、いかに挿話に欠けるにしても、この比類稀な人物のもつ天才と品性についての一つの一般的な観念は伝えてくれるかもしれない。そのお蔭で彼が実にすぐれた意味でも傑出するにいたったもろもろの知的天分と学識にかんしては、すなわち——彼のもろもろの見方の獨創性と包容性、彼の見聞の広さと多様さと正確さ、彼の創意のつきない豊醇さ、ならびに彼の豊かで美しい想像力が古典文化から採り入れてしまっていたもろもろの文飾にかんしては、——彼は、彼の背後に、不朽の業績を残してくれた。彼の私的な真価のためには、すべての証言のうちでも最も確実な証言が、多様な全生活關係を通じて彼について離れなかつた確信と敬意と愛着とのうちにも、見出されるであろう。つりゆくその病弱さ加減にさいなまれながらも、彼が享受した平静さと明朗さ、および自分の友人たちの福祉と関連のあったそれぞれの事柄に、彼が最後まで温かな關心をよせていたことは、彼の体力がゆるすかぎり、彼が毎週一晚を、定例的にもに過していたところの、そして彼の真価を回想し合うのが、憂鬱な和合の絆ではあるけれど、なお一つの心楽しい和合の絆ともなっているところの、一つの小さなグループによって、長く回想されてゆくであろう。

彼の精神のもっと繊細で独特な諸特徴は、跡づけることがおそらく不可能である。その諸態度ならびにその知的諸習性双方のうちに幾多の奇癖があったことは、最も皮相的な觀察者にも、明瞭であった。しかし、彼を知っていた人たちには、これらの奇癖も、彼の諸才幹がほしのままにしていた尊敬の念からは、どのようなものも滅殺するとはなかつたけれども、しかも彼の親友たちのためには、これらの奇癖は、それらが最も興味ぶかい光のうちに、

彼の心情の巧まない素朴さを表示してくれているあいたは、その談話に一種言いようのない魅力を加えはしたけれども、なおそれらを、公衆の眼にも映るよう紹介するには、きわめて練達したある筆力を必要とするであろう。彼は、世の中の一般的商業にも、また實際生活上の業務にも、たしかに適していなかった。彼はその青年時代以来広汎な諸思索に心奪われていたために、また彼独自の創意力が彼の諸思想に絶えず多様な諸資料を供給していたために、彼は、日常の物事にも、また普通の出来事にも、習性的に注意しなくなっていた。そして、彼は、ラ・ブリュエール (La Bruyère) の幻想によってもほとんど凌駕されることのなかった放心にかかわるいろいろの実例を、しばしば示してもいた。交友のさいにさい、彼は、ややもすると自分の学的諸研究に夢中になっていることがあつたし、またその顔付きや身振りによるはもちろんのこと、その口元の動きによつても、ときどき構文に熱中しているように見えた。けれども、わたくしは、最も些細な事柄についての彼の確実な記憶力には、遠く年次をへだてても、しばしば心打たれているものである、だから、このことからしても、また他の幾つかのことからしても、信じたい気持ちになるのではあるが、彼は、次ぎ次ぎと努力を重ねた省察の結果、たまたま起つた時機には、感覺的には彼の注意をひいていたともおもわれない幾多の出来事を思い起すという、放心者たちのあいだではおそらく異常ではない一種の能力を、持っていたのである。

部分的には、多分、今言及してきた欠陥にこそよるものではあつたが、彼は、普通の対話形式の談話には容易に入り込もうとしなかった、そして彼は、自分自身のいろいろな考えを、ややもすると一種の講義の形態をとつて伝えようとした。けれども、彼がそのようにしたときでも、それは、その講説に没頭したいとか、あるいは自分の虚栄心を満足させたいとかいう一種の希望から、けつして起るのではなかつた。彼自身の性向からすると、彼はむしろ、彼の

周囲の人たちの愉快そうな雰囲気を黙って楽しもうとする大変に強い気分であったから、彼の友人たちは、彼に最も興味のありそうな諸論議に彼を引き入れるためには、しばしば些少の計画も打合せなどしないようにしていた。また実際にわたくしは、わたくしがそう言うときでも、行き過ぎであると非難されるであろうとは思わないが、彼は、一つの新しい話題を自分で始めることにも、また他の人たちによって採り上げられた話題にかんして何の準備もしていないように見えることにも、ほとんど全く気づいてはいなかった。実際に、彼の談話が最も弾んだのは、彼だけがその概略を掴んでいる僅少の分野の知識にかんして、彼が自分の天賦の才を思うぞんぶんに發揮するときであった。

彼がちょっとした面識をもつ人物たちについて下していた評価は、しばしば誤っていた。しかし、彼の本性の傾向からすると、彼は、根拠の薄弱な偏見によりもはるかに盲目的な偏愛に、溺れやすかった。人事を拡大してみる見方は、彼の精神が習性的に強調していることではあったが、そのために、彼は、普通の諸性格にまつわる興味のない諸特性を、詳細にわたって研究してみようとする時間も意向も、持ち合せてはいなかった。したがって、知性にかんする諸能力と心情にかんする諸作用には親しく通饒していたけれども、また彼の諸理論のうちでは、天賦の才と諸情感との双方についての最もこまやかな陰影を最も繊細な手法で浮き彫りにすることには慣熟していたけれども、それでも、個々人を判断するさいには、ときどき起ることではあったが、彼の諸評価は、驚くべきほどにまで、真相を外れていた。

また、思慮のいらぬ信頼のおけるその交遊の時間に、彼が書籍類にかんし、また思索上の諸疑問にかんしてあえて述べ立てていた諸見解は、彼の悟性の卓越さと彼の哲学的諸原理の独自の一貫性とからして期待してもよかったであろうほどには、不変ではなかった。それらの見解は、偶発的な事情によって、また瞬間ごとの機智によっても、左

右されやすかった、だから、彼を時折見かけるにすぎない人たちによって受け売りされるときには、彼の眞の諸情操にかんしても、誤った矛盾だらけの諸観念を、示唆した。けれども、これらの折においても、他の大抵の折におけるように、彼の諸言説のうちには、創意性はもちろんのこと幾多の眞実性が、いつも宿っていた、だから、いろいろなときに、彼が同一の主題にかんして公言していたさまざまな見解が、相互を修正して制約し合うように、すべて一つに結び合わされてしまっていたなら、それらの見解も、等しく包括的で正当な一つの決断のための諸資料を、多分提供してくれていたであろう。しかし、その友人たちとの交遊のさいには、彼は、われわれが彼の諸著作において感嘆している適確な諸結論を下そうとするような気持を、少しも持っていなかった。だから、彼は、彼の氣質か彼の想念が対象というものに示してくれるさいの最初の観点からする、その対象にかんする一種の大胆で見事な素描でもって、一般に満足していた。同種のことは、長い親交からして、彼が徹底的に理解してしまっていると想っていたかもしれない諸性格を、自分の気分のおもむくままに、描写しようとしたときには、認められたかもしれない。その肖像は、つねに、生氣にみち、また表現にも富んでいた、しかも、一つの特定な側面の下で観察するときには、その実物にたいして、普通、一種強烈で面白いほどの類似性ももっていた、だが、その実物にかんする一種妥当で完全な概念を、そのすべての次元と均整において、伝えてくれることは、おそらく、減多になかった。——一言で言えば、余りにも体系的すぎるし、また極端に大まかすぎるものが、前以て思いめぐらすことのなかった彼の諸判断の欠点ではあった。

しかしながら、彼の習性におけるこれらの取るに足りない奇癖がどういう仕方で説明されようとも、その習性が彼の精神の純真な無技巧さと密接に関連していたことは、すこしの疑いもありえないことである。この敬愛すべき資質

においては、彼は、善良なラ・フォンテーヌ(La Fontaine)について与えられている説話を、しばしば彼の友人たちにも思い起させたが、この一つの資質は、ラ・フォンテーヌにおいては、その政治上と道徳上の諸著作において、ヨーロッパの称賛を長く伯してきた理性と雄弁とにかんする諸能力とその資質とを独自に結合することからして、一種独特の優雅さを、得ていたものである。

彼の外的な形や風采には、何も異常なものではなかった。全く安らいでいたときには、また談話に熱中していたときには、彼の身振りは活気をおびていて優美でないこともなかった。また彼が愛していた人たちとの交遊のさいには、彼の顔は、言い表わしがたいほどに温情の溢れた微笑に輝いていた。見知らない人たちとの交遊のさいには、その放心癖からして、またおそらくはこの性癖についてのなお一層のその意識からして、彼の態度は、いささか困惑気味であった。——この一つの効果は、閑居を好む彼の習性が彼の構想を完成させるのに役立つと同時に、彼の認識力を縮小するのにも役立つところの、思索的な適正性にかんする諸観念によって、多分、少なからず高揚されたものであろう。彼は、自分の肖像画のためには、けっしてモデルにならなかった。しかし、タッシー(Tassie)の像牌は、彼の横顔についての、また彼の顔形の一般的表情についての、一つの正確な観念を伝えている。

彼の貴重な蔵書は、彼の財産の残部とともに、彼の従弟にあたる弁護士デビッド・ダグラス氏に遺贈された。この青年紳士の教育にさいしては、彼は、自分の余暇の大部分を尽したのであって、自分の死のわずか二年前になっても、(彼が自分の交遊の楽しみを惜まざるをえなくなった時期においても)、彼は、その従弟を、法学研究のため、グラスゴウに送って、ミラー氏の庇護の下においていたのであった。このことは、彼がその著名な教授の諸才幹を支持していただきたいの尊敬の念については言うまでもなく、彼の友人の上達のためにするその私心のない熱意について

も、彼が挙示することができた最も強固な証拠ではある。

① 「最後には、レストン卿 (Lord Reston) の称号の下に、法科大学 (The College of Justice) の一理事」

彼の遺言の執行人は、ブラック博士 (Dr. Black) とハットン博士 (Dr. Hutton) とであったが、両博士とは、彼は、最も親密な心からの友情を習性のようにして長く暮らしてきたのであった、だからこそ、両博士は、その情愛を、彼にそいでしまっていた他の多くの証拠に加えて、なおも彼の臨終を見取るといふいたましい役を引受けてくれられるにもいだったのである。

補遺 スミス氏にかんする前述の説話が王立学会で講読されて後問もなく、一卷をなす彼の『遺稿集』 (Posthumous Essays) が、彼の遺言執行人でありまた友人でもあるブラック博士とハットン博士とによって、公刊された。この一卷には、哲学的諸研究を指導し教示する諸原理にかんする三個の試論が、すなわち——第一番目には、天体物理学史によって、第二番目には、古代物理学史によって、第三番目には、古代の論理学と形而上学にかんする歴史によって例証された試論が、含まれている。これらにおお、他の三個の試論が、すなわち——諸模倣芸術にかんする、幾つかのイギリスとイタリアの韻文詩の間の類同性にかんする、および外的諸感覚にかんする試論が、追加されている。「それらの試論のうちの比較的大部分は」と(編集者の署名の入った一枚の広告文にも述べられているように)、「自由な諸学問と優美な諸芸術にかんする一つの関連史を提示するために、作者がかつては形成していたこともあった一つのプランのうちの諸部分であるようである」。「このプランは、(とわれわれは同じ権威によって報導されているが)、「彼が余りにも広範にわたりすぎるとして長く放棄していたものであった、だから、その関連史のうち彼の手許に保管されていたこれらの部分も、彼の死にいたるまで無視していたものであった」。

この遺稿本は、前述の回想の公刊後まで現われなかつたのであるからして、この遺稿本が内容として異なる諸試論にかん

して、何か所見を述べることは、これらの覚書の意図とは無縁であるだろう。これらの試論のもつ真価は、この二人の高名な編集者によっても、確かに、過大には評価されていなかった、というのも、そのときでも、編集者は、その希望を、次のように表明していたからである。すなわち、「愛読者なら、それらの試論のうち、この作者の残余の諸労作においても異彩を放っているかの適切な関連性、かの十全で正確な表現、およびかの明快な例証を見出すであろうということ、そして、彼が彼の他の諸著作によっても実に正当な意味で獲得していた多大の名声に多くを加えることはむずかしいにしても、これらの試論も、満足感と快感とをもって読まれるであろうということ」を。最初の三個の試論は、とりわけ、天体物理学史にかんする未完の遺稿は、彼の最も完結した諸構文のうちのかなるものと同様に、おそらく、彼の豊かで独創的で包擁的な精神の独特な諸特徴を強く明示しているものではある。

人間的な意味でスミス氏を熟知していなかった読者たちのうちのある人々にはおそらく起ることがあるかもしれない一種の揚足取りを未然に妨止するために、わたくしはこの機会をかりて言及しておくことにするであらうが、前述の説話の過程において、彼の名誉ある法学博士の称号(この称号は彼が彼の教授職を辞するほんの少し前に、グラスゴウ大学によって、彼に授与された)を削除するにさいしては、わたくしは、彼自身の興趣にばかりでなく、わたくしも彼との交遊を享受する幸福をもつにさいしてのグルーブの一定の慣行にも、従ってきたのである。彼が彼の著書の扉における以外にはけっして採り上げなかったし、また彼も、ヒューム氏その他の最も親密な彼の友人たちの書簡類のうちではけっして言及されることのない一個の称号を、彼の死去のかくもすぐ後で、彼に呈上しているということでは、わたくしも、わたくしの説話を読まれる以前の愛読者たちから、正当な意味で、銜学の誇りを受けるでもあらう。しかし、その真相は、(わたくしの耳も、その当時は、スミス博士という名称を、ほとんど全く聴き馴れていなかった)ので、それが、いかに取るに足りないことであるにしても、一人ならずもの批評家によつて、一つの重大な譴責問題とまで誇大視されてしまった事として、幾年か後になってからわたくしに指摘されるまでは、わたくしも、その省略を全然意識することがなかったということ、である。